任意波形発生器を用いた低歪信号発生技術の理論解析と実験検証

安部 文隆 澁谷 将平* 小林 佑太朗 東野 将史 佐々木 秀 荒船 拓也 小林 春夫(群馬大学)小林 修(STARC)

Analysis and Experiment of Low Distortion Signal Generation Method with Arbitrary Waveform Generator Fumitaka Abe, Shohei Shibuya*, Yutaro Kobayashi, Masashi Higashino

Shu Sasaki, Takuya Arafune, Haruo Kobayashi(Gunma University), Osamu Kobayashi(STARC)

This paper describes analysis and experiment verification of our proposed low distortion signal generation method with an arbitrary waveform generator (AWG). The proposed phase-switching method can cancel third order harmonics caused by AWG nonlinearity, but it also cancels the one caused by the ADC nonlinearity; hence the ADC third order nonlinearity cannot be measured. We show in analysis and experiment that just adding a simple analog LPF at the AWG output is enough to solve this problem.

φ

キーワード:和文キーワード,任意波形発生器,低歪信号,高調波歪,ADCテスト (Keywords, Arbitrary Waveform Generator, Low Distortion Signal, Harmonics, ADC Testing)

1. はじめに

近年、半導体産業において製造にかかるシリコンコスト が減少している一方、SoC 製造出荷時のテストコストが増 加している。SoC テストにおける低コスト化によって半導 体産業における製造全体の低コスト化につながる⁽¹⁾⁻⁽³⁾。

そこで、SoC 内部における重要なアナログ部分の構成要 素である ADC(Analog to Digital Converter)の線形性テス トの高品質化/低コスト化手法を検討した。テスト信号発生 は任意波形発生器 (Arbitrary Waveform Generator: AWG) を用いて発生させる。ADC 入力テスト信号は低歪み 単一正弦波が要求されるが AWG 内部の DAC の非線形性 により高調波歪み(Harmonic Distortion: HD) が発生して しまう。特に、安価な AWG を用いた場合に高調波歪みに よりテスト品質が劣化する。この高調波歪みは入力信号周 波数近傍に発生するためフィルタでの低減は難しい。そこ で、AWG 内部の DSP 部のプログラムを工夫することでハ ードウェア部分の変更なしに高調波歪みを低減させる方法 を提案した(4)-(6)。そこではプログラム変更に伴い入力信号近 傍の高調波が低減する一方、fs/2の近傍(fs:サンプリング 周波数)、つまり入力周波数から十分離れた領域にスプリア スが発生する。(この機能をノイズシェーピングに対応させ ディストーションシェーピングと呼ぶ)

本論文では、今回の手法による高調波検出誤差に関して 数式を用いた理論解析と実測による検出結果の両方でアプ ローチしていく。

2. AWG を用いた低歪み信号の発生

AWG は DSP(波形メモリ)と DAC によって構成されてい る。DSP において任意のデジタル信号を発生し DAC を通 すことでアナログ信号に変換する。しかしこのとき DAC の 非線形性により入力信号の高調波歪みが出力信号に含まれ る。この高調波歪が含まれると ADC の線形性の正確な測定 が難しくなる。そこで先に提案した DSP 部のプログラムを 変更することで高調波歪みを低減する⁽⁴⁾⁻⁽⁵⁾。

〈2·1〉 従来手法、提案手法テスト信号の発生

AWG 内の DSP より出力する DAC へのデジタル信号を 入力信号D_{in}とする。AWG より発生する従来手法のテスト 信号を(1)式に示す。

$$D_{\rm in} = A \sin(2\pi f_{in} n T_s) \tag{1}$$

ここで、nは整数。T。はサンプリング周期である。

提案手法である、AWG の位相差切り替え信号を次式で示 す。

$$D_{in} = \begin{cases} X_0 = A \sin(2\pi f_{in} n T_s + \varphi_0) & n: \text{ iff} \\ X_1 = A \sin(2\pi f_{in} n T_s + \varphi_1) & n: \text{ iff} \\ \end{cases}$$
(2)

$$= \varphi_0 - \varphi_1 = \pi/N \tag{3}$$

(2)式から読み取れるように、位相差切り替え信号は位相差 φをもつ二つの信号を1CLKごとに切り替えた信号である。 位相差φは N 次の高調波を低減する際の切り替える信号の 位相差である。位相差切り替え信号の生成アルゴリズムを 図1に、AWG から ADC へのテストの略図を図2に示す。







Fig2. Block image of ADC linearity testing

〈2·2〉3次高調波低減アルゴリズム

高調波ひずみの中で多くの場合もっとも影響が大きい 3 次高調波歪み(3rd order Harmonic Distortion : HD3)につ いて低減効果が得られることを示す。

AWG の出力信号より HD3 を低減するため DAC 入力信号 D_{in}は次式の通りである。

 $D_{in} = \begin{cases} X_0 = A \sin(2\pi f_{in} nT_s + \pi/6) & n: \text{ iff} \\ X_1 = A \sin(2\pi f_{in} nT_s - \pi/6) & n: \text{ iff} \\ \end{cases}$ (4)

今回は3次高調波を低減することを目的としているため π/3の位相差を持つように信号を設定した。AWGの3次高 調波を発生させる非線形性のモデルを次式で与える。

Y = $a_1 D_{in} + a_3 D_{in}^3$ (5) Y は AWG の出力信号である。従来手法および提案手法にお ける AWG の出力信号を scilab によってプロットした図が 図 2 である。(振幅 A = 1[V], f_{in} = 128[Hz], f_s = 4096[Hz]、 サンプリング点数=4096)また、図 2,の信号をフーリエ変換 し解析したものが図 3,4 である。図 3,4 より提案手法におい て従来信号と比較して HD3 が大きく低減しており、 $f_s/2$ 付 近の周波数にスプリアスが発生していることがわかる。こ のスプリアスを LPF などで取り除くことで歪みの少ないテ スト用信号を得ることができる。

発生させた位相差切り替え信号を ADC に入力し、ADC の非線形性による HD3 を測定する。ADC の 3 次高調波歪 みを発生させる非線形性を次式で与える。

$$Z = b_1 Y + b_3 Y^3 (6)$$

ここで、ADC に位相差切り替え信号をそのまま入力すると HD3 を低減させる成分 fs/2-fin が低減されないまま入力さ れることで、ADC 自体の HD3 までもキャンセルしてしま い正確な ADC の HD3 の測定ができない(図 6)。そのた め、LPF などで fs/2-fin 成分を低減することで ADC の HD3 を得る。(図 7)



図 3 従来信号と位相差切り替え信号の波形 Fig.3 Conventional signal and phase switching signal



図 4 従来手法の AWG 出力スペクトル Fig4. AWG output spectrum of conventional signal



図 5 位相差切り替え手法での AWG 出力スペクトル Fig.5 AWG output of phase switching signal



図 6 フィルタによる低減なしの ADC 出力 Fig.6 ADC output spectrum without attenuation spurious @ fs/2-fin



Fig.7 ADC output spectrum with attenuation $% \mathcal{F}(\mathcal{F})$ spurious @ fs/2-fin

<2·3> 3次高調波低減の原理

位相差切り替え手法によって AWG の非線形性による HD3 をキャンセルできることはすでに示した。その原理の説明 を図8に示す。3次高調波歪みの場合を例にすると、3次の 非線形性によって生じるひずみはもともとの周波数の3倍 の周波数を持つ。その為、周波数の同じ2つの信号にπ/3 の位相差があった場合、その位相差も3倍となるため位相 差はπとなる。位相差π、周波数が同じ信号は打ち消しあう ためHD3はキャンセルされる。



図8 位相差切り替え手法による HD3 低減の原理 Fig.8 Principle of 3rd order harmonic cancellation with the phase-switching technique.

3. 理論解析

<3.1> 理論解析モデル式

位相差切り替え手法による高調波歪みの低減原因を探る ため、数式モデルによる理論解析を行う。1CLK ごとに信号 を切り替えるため、理論解析には次式を用いる(4)。

$$D_{\rm in} = \frac{1 + (-1)^n}{2} X_0 + \frac{1 - (-1)^n}{2} X_1 \tag{7}$$

$$(-1)^n = \cos(n\pi) = \cos\left(2\pi \cdot \frac{f_s}{2} \cdot nT_s\right) \tag{8}$$

<3.2> 3次高調波歪低減アルゴリズムの理論解析 式(5),(6),(7),(8)を用いて AWG の出力信号 Y を求めると、 次式の通りになる

$$Y = P \sin(2\pi f_{in} nT_s)$$

+ $Q \cos\left(2\pi \left(\frac{f_s}{2} - f_{in}\right) nT_s\right)$
+ $R \cos\left(2\pi \left(\frac{f_s}{2} - 3f_{in}\right) nT_s\right)$

(9)

$$\begin{cases} \mathsf{P} \equiv \frac{\sqrt{3}}{2} \Big(a_1 A + \frac{3}{4} a_3 A^3 \Big) \\ \mathsf{Q} \equiv \frac{1}{2} \Big(a_1 A + \frac{3}{4} a_3 A^3 \Big) \\ R \equiv -\frac{1}{4} a_3 A^3 \end{cases}$$

(9)式と図4を比較すると、(9)式の通りの位置にスペクトル が発生していることがわかる。(9)式を(6)式に代入しフィル タによる低減を考慮しない場合の ADC 出力を次式に示す。 ただし以下の条件である。

$$f_{s}(AWG) = f_{s}(ADC)$$
(10)

$$Z(nT_{s}) = \left\{b_{1}P + b_{3}\left(\frac{3}{4}P^{3} + \frac{3}{2}PQ^{2} + \frac{3}{2}PR^{2} - \frac{3}{2}PQR\right)\right\} \sin(2\pi f_{in}nT_{s})$$

$$+ b_{3}\left(-\frac{1}{4}P^{3} + \frac{3}{2}PQR\right) \sin(2\pi 3f_{in}nT_{s})$$

$$+ \left\{b_{1}Q + b_{3}\left(\frac{3}{4}Q^{3} + \frac{3}{2}P^{2}Q - \frac{3}{4}P^{2}R + \frac{3}{2}QR^{2}\right)\right\} \cos\left(2\pi \left(\frac{f_{s}}{2} - f_{in}\right)nT_{s}\right)$$

$$+ b_{3}\left(-\frac{3}{4}P^{2}Q + \frac{3}{4}Q^{2}R\right) \cos\left(2\pi \left(\frac{f_{s}}{2} + f_{in}\right)nT_{s}\right)$$

$$+ \left\{b_{1}R + b_{3}\left(\frac{3}{4}R - \frac{3}{4}P^{2}Q + \frac{3}{2}P^{2}R + \frac{3}{2}Q^{2}R\right)\right\} \cos(2\pi \left(\frac{f_{s}}{2} - 3f_{in}\right)nT_{s}$$

$$+ b_{3}\left\{-\frac{3}{4}P^{2}R + \frac{3}{4}QR^{2}\right\} \cos\left(2\pi (\frac{f_{s}}{2} - 5f_{in}\right)nT_{s}$$

$$+ b_{3}\left\{-\frac{3}{4}PQ^{2} + \frac{3}{2}PQR\right\} \sin(2\pi (f_{s} - 3f_{in})nT_{s})$$

$$+ b_{3}\left(\frac{3}{4}PR^{2} - \frac{3}{2}PQR\right) \sin(2\pi (f_{s} - 3f_{in})nT_{s})$$

$$+ b_{3}\left(\frac{3}{4}PR^{2} - \frac{3}{2}PQR\right) \sin(2\pi (f_{s} - 5f_{in})nT_{s})$$

$$+ \frac{1}{4}b_{3}Q^{3}\cos(2\pi \left(\frac{3}{2}f_{s} - 3f_{in}\right)nT_{s})$$

$$+ \frac{3}{4}b_{3}QR^{2}\cos\left(2\pi \left(\frac{3}{2}f_{s} - 3f_{in}\right)nT_{s}\right)$$

$$+ \frac{1}{4}b_{3}R^{3}\cos\left(2\pi \left(\frac{3}{2}f_{s} - 9f_{in}\right)nT_{s}\right)$$

$$+ \frac{1}{4}b_{3}R^{3}\cos\left(2\pi \left(\frac{3}{2}f_{s} - 9f_{in}\right)nT_{s}\right)$$

$$+ \frac{1}{4}b_{3}R^{3}\cos\left(2\pi \left(\frac{3}{2}f_{s} - 9f_{in}\right)nT_{s}\right)$$

(11)

(11)式より ADC 出力の HD3(3fin)成分はエイリアシングに

より折り重なる成分 $sin(2\pi(f_s - 3f_{in})nT_s)$ との和により次式の通りになる。

$$b_3\left(-\frac{1}{4}P^3 + \frac{3}{2}PQR\right) - b_3\left\{-\frac{3}{4}PQ^2 + \frac{3}{2}PQR\right\} = 0$$
(12)

(11),(12)式より、エイリアシングによる折り返し信号によっ て HD3 が低減されている。よってフィルタによってスプリ アスの低減を行わない場合 ADC の HD3 までキャンセルさ れることがわかる。

ADC の HD3 における fs/2 近傍のスプリアスに対する依 存度を確かめるために(9)式の基本波を除く各項にフィルタ による減衰を表す係数 α , β (0 $\leq \alpha$, $\beta \leq 1$)を掛けて同様の操作 を行う。((13)式参照)

$$Y = P \sin(2\pi f_{in} nT_s) + \alpha \cdot Q \cos\left(2\pi \left(\frac{f_s}{2} - f_{in}\right) nT_s\right) + \beta \cdot R \cos\left(2\pi \left(\frac{f_s}{2} - 3f_{in}\right) nT_s\right) Z(nT_s) = \left\{b_1 P + b_3 \left(\frac{3}{4}P^3 + \frac{3}{2}\alpha^2 PQ^2\right)\right\}$$
(13)

$$\begin{aligned} &(\Lambda II_{s}) = \left\{ b_{1}P + b_{3} \left(\frac{1}{4}P^{2} + \frac{1}{2}a^{2}PQ^{2} + \frac{3}{2}\beta^{2}PR^{2} - \frac{3}{2}\alpha\beta PQR \right) \right\} \sin(2\pi f_{in}nT_{s}) \\ &+ b_{3} \left(-\frac{1}{4}P^{3} + \frac{3}{2}\alpha\beta PQR \right) \sin(2\pi 3f_{in}nT_{s}) \\ &+ \left\{ b_{1}\alpha Q + b_{3} \left(\frac{3}{4}\alpha^{3}Q^{3} + \frac{3}{2}\alpha P^{2}Q - \frac{3}{4}\beta P^{2}R + \frac{3}{2}\alpha\beta^{2}QR^{2} \right) \right\} \cos\left(2\pi \left(\frac{f_{s}}{2} - f_{in} \right) nT_{s} \right) \\ &+ b_{3} \left(-\frac{3}{4}\alpha P^{2}Q + \frac{3}{4}\alpha^{2}\beta Q^{2}R \right) \cos\left(2\pi \left(\frac{f_{s}}{2} + f_{in} \right) nT_{s} \right) \\ &+ \left\{ b_{1}\beta R + b_{3} \left(\frac{3}{4}\beta^{3}R^{3} - \frac{3}{4}\beta P^{2}Q + \frac{3}{2}\beta P^{2}R + \frac{3}{2}\alpha^{2}\beta Q^{2}R \right) \right\} \cos\left(2\pi \left(\frac{f_{s}}{2} - 3f_{in} \right) nT_{s} \right) \\ &+ b_{3} \left\{ -\frac{3}{4}\beta P^{2}R + \frac{3}{4}\alpha\beta^{2}QR^{2} \right\} \cos\left(2\pi \left(\frac{f_{s}}{2} - 5f_{in} \right) nT_{s} \right) \\ &+ b_{3} \left\{ -\frac{3}{4}\alpha^{2}PQ^{2} + \frac{3}{2}\alpha\beta PQR \right\} \sin(2\pi (f_{s} - 3f_{in}) nT_{s}) \\ &+ b_{3} \left\{ -\frac{3}{4}\alpha^{2}PQ^{2} + \frac{3}{2}\alpha\beta PQR \right\} \sin(2\pi (f_{s} - 3f_{in}) nT_{s}) \\ &+ b_{3} \left(\frac{3}{4}\beta^{2}PR^{2} - \frac{3}{2}\alpha\beta PQR \right) \sin(2\pi (f_{s} - 5f_{in}) nT_{s}) \\ &+ \frac{1}{4}b_{3}\alpha^{3}Q^{3} \cos\left(2\pi \left(\frac{3}{2}f_{s} - 3f_{in} \right) nT_{s} \right) \\ &+ \frac{3}{4}b_{3}\alpha^{2}\beta Q^{2}R \cos\left(2\pi \left(\frac{3}{2}f_{s} - 5f_{in} \right) nT_{s} \right) \\ &+ \frac{3}{4}b_{3}\alpha\beta^{2}QR^{2} \cos\left(2\pi \left(\frac{3}{2}f_{s} - 7f_{in} \right) nT_{s} \right) \end{aligned}$$

$$+\frac{1}{4}b_3\beta^3R^3\cos\left(2\pi\left(\frac{3}{2}f_s-9f_{in}\right)nT_s\right)$$

(14)

(13),(14)式は、それぞれ ADC 入力前段に LPF を通した 場合の ADC 入力、出力式である。

(14)式より HD3($\sin(2\pi 3 f_{in} nT_s)$)とエイリアシングによって 折り重なる, $\sin(2\pi (f_s - 3 f_{in}) nT_s)$ の和による HD3 成分を求 めた式を示す。

$$b_{3}\left(-\frac{1}{4}P^{3}+\frac{3}{2}\alpha\beta PQR\right)-b_{3}\left\{-\frac{3}{4}\alpha^{2}PQ^{2}+\frac{3}{2}\alpha\beta PQR\right\}$$

$$=b_{3}\left(-\frac{1}{4}P^{3}+\frac{3}{4}\alpha^{2}PQ^{2}\right)$$

$$=b_{3}\left\{-\frac{1}{4}\left(\frac{\sqrt{3}}{2}\left(a_{1}A+\frac{3}{4}a_{3}A^{3}\right)\right)^{3}\right\}$$

$$+\frac{3}{4}\alpha^{2}\left(\frac{\sqrt{3}}{2}\left(a_{1}A+\frac{3}{4}a_{3}A^{3}\right)\right)\left(\frac{1}{2}\left(a_{1}A+\frac{3}{4}a_{3}A^{3}\right)\right)^{2}\right\}$$

$$=b_{3}\left\{\frac{3\sqrt{3}}{8}\left(a_{1}A+\frac{3}{4}a_{3}A^{3}\right)^{3}\right\}\left(-1+\alpha^{2}\right)$$

$$=-b_{3}\left\{\frac{3\sqrt{3}}{8}\left(a_{1}A+\frac{3}{4}a_{3}A^{3}\right)^{3}\right\}\left(1-\alpha^{2}\right)$$
(15)

(15)式から、位相差切り替え信号用いることによる ADC の 3 次高調波の大きさは、fs/2-fin のスプリアスの減衰率にの み依存する。(15)式を用いて、理想的な正弦波が ADC に入 力したときの HD3 と位相差切り替え信号を用いて異なる減 衰率における HD3 との誤差を図 8 に示す。

図 9 より fs/2-fin のスプリアスを 10dB 以上減衰することで ADC の理想的な HD3 と 1%以下の誤差で測定できる。



図 9 fs/2-fin 成分の減衰に対する ADC 本来の HD3 との 誤差

Fig.9 Error of the true ADC HD3 by reduction fs/2-fin component

実機による測定

<4.1> AWG による位相差切り替え信号の生成 AWG(Agilent 33220)をもちいて従来信号((1)式)および、 位相差切り替え信号を発生させる。位相差切り替え信号は 基本波の振幅を従来信号と近似させるため、次式を用いる。 $(f_{in} = 200kHz, f_s(AWG) = 10MHz, A = 1)$ $D_{in} = \begin{cases} X_0 = 1.15A \sin(2\pi f_{in}nT_s + \pi/6) & n: 偶数\\ X_1 = 1.15A \sin(2\pi f_{in}nT_s - \pi/6) & n: 奇数 \end{cases}$ (16)
AWG から出力した信号を図 10、信号をスペクトルアナラ イザ(ADVANTEST R3267)を用いて観測したスペクトル図

を図 11 に示す。図 10 よりシミュレーション、理論解析と 同様に HD3 の低減、fs/2 近傍でのスプリアス出現が見て取 れ実機においての位相差切り替え信号の効果が得られてい ることが確認できる。







Fig.11 AWG output spectrum with Agilent 33220A <4.2> 位相差切り替え信号による ADC テスト

AWG より出力したテスト用信号を用いて、実際の ADC における位相差切り替え信号の HD3 低減の効果を測定する。測定対象は

● 12bit SAR ADC(Analog Devices AD7356)×6 測定に用いた機器は

- AWG (Agilent 33220A),
- スペクトルアナライザ(ADVANTEST R3267)
- AD7356 測定用ボード(EVAL-AD7356)
- EVAL-AD7356 駆動用ボード(EVAL-CED1Z)
- 試作 LPF
 {5th バタワースフィルタ(fc=250[kHz])
 4th バタワースフィルタ (fc=1.0,2.0,2.7.3.7[kHz]) }

である。また、前章までの議論にあるとおり ADC の HD3 の測定のためには ADC 入力前段に LPF を挿入する必要が ある。その為のLPFは試作し、周波数特性分析器(Frequency Response Analyzer: FRA)によって周波数特性を測定した。 (図 12 参照)⁽⁵⁾。信号のパラメータは以下の通り。

- $f_{in} = 200[kHz]$
- $f_s(AWG) = 10[MHz], f_s(ADC) = 3.4786261[MHz]$

ADC の HD3 を測定するに当たり ADC に理想的な正弦 波が入力したときの HD3 の値、つまり ADC の本来の HD3 を測定する必要がある。試作した LPF のうち急峻な特性を 持つ 5 次の LPF を従来テスト信号の ADC 入力前段に挿入 する事で AWG の HD3 を取り除いた ADC 本来の HD3 を 得る(図 13 参照)。この結果と測定した結果を比較して提案 手法の効果を確認する。

従来信号を入力した場合と位相差切り替え信号を入力した場合のADC出力を比較する。図14、図15はそれぞれ従 来手法、提案手法をAWGより入力しfc=1kHzのLPFを通 し、ADCに入力した際の出力結果である。2つの結果を比 較すると従来手法のHD3は-88.5[dBFs]、位相差切り替え 手法は-92.6[dBFs]と測定でき4.1[dBFs]の低減、ADC本来の HD3に対して3%以上の誤差改善となっている。

6個のサンプルに対して、フィルタによる fs/2-fin の低減 率に対する従来信号、提案信号それぞれの本来の HD3 との 検出誤差を図 16 に示す。図 16 から各サンプルにおいて約 3~6[%]の検出誤差改善が読み取れる。この点から位相差切 り替え手法は実際の ADC テストにおいて AWG の非線形性 による HD3 の検出誤差の影響を低下し ADC の線形性テス トの精度を向上させる効果があるといえる。















Fig.15 ADC output spectrum with phase-switching test signal



(6つの ADC サンプルでの測定結果)

Fig.16 $3^{\rm rd}$ order harmonic measurement errors for AD7356.

5. まとめ、考察

本論文では、ADC テストにおいて安価であるが出力に歪 み成分の大きい任意波形発生器を用いて、ハードウェアの 変更なしに低歪みの信号を発生させることで ADC テスト の低コスト化を目的とした位相差切り替え信号の ADC テ ストにおける数式を用いた理論解析および実機による測定 を行った。

理論解析

位相差切り替え手法における HD3 の低減原因を明 らかにし、fs/2-finのスプリアスに対する HD3の検 出誤差について示した。

実機による測定 測定結果より、ADC の高調波歪みの検出テストにお いて 3~6[%]の検出誤差率改善が見込めることを示 した。

理論解析、測定に関する考察 実機における測定結果が理論計算によって得られた 図 9 の測定誤差と異なる理由は次のように考えられ る。実機での測定の場合は AWG と ADC のサンプ リング周波数が異なるため、周波数3finの信号にエイ リアシングによる周波数f_{s(AWG)} - 3finの信号が折り 重ならなくなる。よって AWG 由来の HD3 を低減し たことにより ADC 出力の HD3 の検出誤差は改善さ れるが、スプリアスの低減による検出誤差の大きな 変化がないと考えられる

今後の課題として以下のことを検討中である。

- シングルトーン信号において(4)の文献の手法を用い、3次以外の高調波歪み低減の効果を実機にて測定する
- 2トーン信号において(6)の文献中の各手法における 理論計算および実機による測定を行う。



- (1) 小林春夫,山口隆弘「デジタルアシスト・アナログテスト技術」電子 情報通信学会,集積回路研究会,大阪(2010年7月)
- (2) 小林春夫," ミクストシグナル SOC テスト容易化技術への挑戦",SEMICON Japan 2010 SEMI テクノロジー・シンポジウム (STS テストセッション) (2010 年 12 月)
- (3) 小林春夫,新津葵一、高井伸和、山口隆弘,「デジタルアシスト・ア ナログRFテスト技術・サブ100nm ミックストシグナルSOCの テストの検討・J電子情報通信学会 総合大会、東京(2011 年3 月).
- (4) K. Wakabayashi, K. Kato, T. Yamada, O. Kobayashi, H. Kobayashi, F. Abe, K. Niitsu, "Low-Distortion Sinewave Generation Method Using Arbitrary Waveform Generaton", Journal of Electronic Testing, vol.28, no. 5, pp.641-651 (Oct.2012)
- (5) F.Abe, Y.Kobayashi, K. Sawada, K. Kato, O. Kobayashi, H. Kobayashi, "Low-Distortion Signal Generation for ADC Testing", IEEE International Test Conference, Seattle, WA (Oct. 2014)
- (6) K. Kato, F. Abe, K. Wakabayashi, C. Gao, T. Yamada, H. Kobayashi, O. Kobayashi, K. Niitsu, "Two-Tone Signal Generation for ADC Testing," IEICE Trans. on Electronics, vol.E96-C, no.6, pp.850-858 (June 2013).